

語られはじめた「グローバリズム以後の世界」

東條 加寿子

新しい年を迎えて、今、世界が最も注視しているのは、2 週間後に迫ったアメリカ新大統領の就任演説でしょう。トランプ新大統領は何をどのように語るのか。英語教育に携わるものとして、どのようなフレーズが世界に投げかけられるのか、注目したいところです。2017 年の世界は、このアメリカ新大統領の就任を皮切りに、激動が予想されます。

その兆しは、昨年あたりから現れてきたと言えましょう。イギリスの EU 離脱やアメリカの新大統領選出をどのような流れの中で捉えたらいいのかという議論とともに、「グローバリズム以後の世界」が、今、語られはじめています。そんな中、フランス人のエマニュエル・ドット氏はグローバリズムの終焉を予言しています（『混迷の世界を読み解く』NHK2016 年 6 月放送）。グローバリズムは一体何をもたらしてきたのか。トッド氏は、グローバリズムがもたらしたのは、格差のグローバル化であると言います。拡大する格差社会に対する不満や怒りが、ボーダレスな相互依存の世界を追求することから、内向きな自国中心主義に振り子を振り戻しつつあるとの分析です。現代知識人の巨匠であるドット氏の著書には、『グローバリズムが世界を滅ぼす』（文春新書、2014 年 6 月）、『問題は英国ではない、EU なのだ 21 世紀の新・国家論』（文春新書、2016 年 9 月）、『グローバリズム以後 アメリカ帝国の失墜と日本の運命』（朝日新書、2016 年 10 月）といったものがあります。人口分析や家族などの社会構造の分析に基づいたトッド氏の論考は先見的で、これまでにソビエト連邦の崩壊やイギリスの EU 離脱など、数々の歴史的転換に関わる予言的中させていますから、ポストグローバリズムの議論もかなりの現実味を帯びていると言えましょう。

ボーダレスな世界を追求した結果が「格差」であり、人々の「不寛容」であるとすれば、それは皮肉なことです。そしてそのことは、私たちが携わる日本の教育にとっても皮肉なことです。なぜならば、新学習指導要領によって問題解決能力やコミュニケーション能力の育成を掲げ、グローバル化に対応すべく教育の態勢を整えたばかりだからです。

と、ここまで書いて、そのような捉え方は少し短絡的であることに気づきます。私たちを取り巻く国際社会はまさに不確実で、さまざまな価値観が相互に関わり合い、時として牽制し合いながら動いています。「グローバル化」という一時代の価値に捉われることなく、主体的に判断して行動する力の涵養が、今、これまで以上に求められているのでしょう。

（とうじょう・かずこ 教授／教員養成センター）